

令和7年度第2回秋田県読書活動推進協議会 議事要旨

日 時：令和7年10月3日（金） 14：00～15：30

会 場：県庁本庁舎 73会議室

出席者：委 員 中尾信一（議長）、加賀谷龍二、高橋秀明、木村加奈子

事務局 県文化振興課 永須課長、高橋推進監、藤澤チームリーダー、佐々木主査

県次世代・女性活躍支援課 船木主事

県長寿社会課 安田副主幹

県障害福祉課 近藤主事

県教育庁総務課 北條副主幹（兼）企画監

県教育庁幼保推進課 由利指導主事

県教育庁義務教育課 酒井指導主事

県教育庁高校教育課 物部指導主事

県教育庁生涯学習課 青谷主査

県立図書館 成田主幹（兼）チームリーダー

生涯学習センター 淀谷副所長

議 事：第4次秋田県読書活動推進基本計画の項立て及び指標について

【議事内容】

（文化振興課）

第4次秋田県読書活動推進基本計画の項立て及び資料について、資料1、2により説明

（中尾委員）

ただいまの説明について、確認したい事項やご意見を伺いたい。

（木村委員）

視覚障害者等に対する項目があるが、県ではディスレクシア（識字障害）に関する統計を取っているか。

（障害福祉課）

届出のあった方については把握している。

（木村委員）

各市町村の把握状況は分かるか。

(障害福祉課)

後ほど確認する。

(加賀谷委員)

視覚障害者等へのサービスというのは点字図書のことを指すのか。大活字本も含まれるのか。

(文化振興課)

点字図書や大活字本のほか、身体的事情により本のページがめくれないといった読書に支障がある人が読書できる環境を整えるということである。

(県立図書館)

読書が困難な方向けに、点字図書、大活字本、録音・朗読のCD・カセットテープ、デジタル録音図書、触る絵本、LLブック(大きな文字と簡単な言葉で書かれた本)等の資料を、バリアフリーコーナーとして設置している。

(加賀谷委員)

来館の際には事前予約が必要なのか。

(県立図書館)

予約制とはしていない。広く県民に門戸を開くということで、点字図書館に行かないまでも本を読むのが困難な方も県立図書館を利用しているし、点字図書館と県立図書館の両方を利用している方もいる。

(高橋委員)

資料2の19番20番には学校図書館に行く児童・生徒の割合、21番には学校図書館を利用する生徒と記載されているが、この違いは何か。利用する中には、図書館で本を借りたり、勉強する生徒が含まれているのか。

22番の1か月に本を1冊以上読む生徒の割合について、ここで言う本の定義は何か。

(義務教育課)

19番20番の文言については、国の全国学力・学習状況調査をそのまま活用している。読書活動という意味で捉えているが、図書館での過ごし方については考慮していない。

(高校教育課)

学校図書館を利用するということについては、読書しに行くほか、自学自習等利用する、

授業で利用するということも含めている。

22番の本の定義については、漫画・雑誌等を除いて調査している。令和6年度の調査からは、本の中に電子書籍を含めることにした。

(高橋委員)

割合を出す際には学校司書が生徒数をカウントしているのか。

(高校教育課)

高校は、生徒一人一人へのアンケートによるものである。

(義務教育課)

小・中学校も同様で、全国学力・学習状況調査の際の質問紙調査により児童・生徒が回答しているものである。

(高橋委員)

47番の「県民読書の日」を知っていると答える参加者の割合の参加者というのは、何かのイベントの参加者に対して聞いているのか。

(文化振興課)

啓発イベントの参加者に対して実施するアンケートの結果である。

(高橋委員)

全県的な数値ではなく、イベント参加者のみということか。

(文化振興課)

そのとおりである。

(中尾委員)

項立ての4関係機関との協働による読書活動の推進について、様々なイベントを開催しているが、代表的なイベントの参加人数はどのくらいなのか。

(生涯学習課)

当課の代表的なイベントとしてビブリオバトルを開催しているが、例年80名ほどの中高生が参加している。11月末の県大会では例年200名前後の観覧者がいる。

(文化振興課)

当課の啓発イベントについて、昨年度は404名の参加があった。参加申込多数のため抽選となっており、多くの県民の方に関心を寄せていただいている。

(中尾委員)

説明についての質問はここまでとし、項立てと指標の内容についてご意見を伺いたい。

(木村委員)

北秋田市の社会教育委員として学校と地域を結ぶ取組を行っているが、その推進計画中でも読書推進の項目がある。県の読書計画では、学校は学校内、地域は地域内の取組にそれぞれ止まっているので、結びつけるような取組があってもいいのではないかと感じたが、どうか。

(文化振興課)

北秋田市では、地元住民が学校に来る場があって、そこで読書推進を展開するということが。

(木村委員)

学校によるが、学校図書館を地域に開放したりしている。また、北秋田市は、各地域の図書館や各地区の公民館に設置された図書室へのアクセスが悪い。本が点在し、近くの図書室に読みたい本が無い場合は取り寄せになるので、学校図書館を開放している。地域の行事の中に学校も関わってもらいイベントを実施していければいいと考えている。

(義務教育課)

地域との協働ということになるとコミュニティ・スクール等の取組か。

(生涯学習課)

学校と地域との協働活動は多岐にわたっている。北秋田市は学校図書館を地域に開放するなど協働で読書推進に取り組まれているということであるが、県の計画として、資料1の項立てには盛り込まれていない。

(県立図書館)

県の読書計画は当初、生涯学習課で作成しており、子どもが対象だったが、その後、県全体で取り組むべきということで、知事部局に業務が移管され、対象範囲が広まった。当初の学校教育としての読書から、福祉分野や地域活性化要素も入ってくるようになった。

(木村委員)

県から施策を市町村におろして、地域の課題・実態に合わせて、実施していくという考え方になるのか。

（文化振興課）

実施内容についてはまずは市町村との検討になる。県でも市町村との協議会の場を設け情報交換しているので、広げていくことはできる。また、コミュニティ・スクールの実施については、各学校と地域との関わり方などそれぞれ状況が異なるとも考えられるので、確認しながら進めていく必要がある。目標を明らかにし、課題を克服しながら情報交換していくことを大事にしたい。

（木村委員）

では、今回の計画には盛り込まずにそれぞれの地域の判断で進めていくということか。

（文化振興課）

地域課題の解決については、意見を伺いながら検討していきたい。

（高橋委員）

項立ての3地域における読書活動の推進について、（1）市町村立図書館等の機能の充実とあるが、②は市町村立図書館等職員として図書館サービスをしてくための育成、③は図書館利用の促進ということで、それぞれリンクできるようになってほしい。図書館は図書館に来たお客さんに対してのサービスは素晴らしいものがあるが、図書館に来ない方への利用促進の働き掛けを高めていく必要がある。育成しながら、読書推進をどうやって充実させていくかを工夫してリンクさせていってほしい。

（2）読書活動推進に係る地域人材の充実については、人材の斡旋だけでなく、活動している人たちと情報交換できるようにしてほしい。ボランティア団体自体も高齢化が進んでいるが、若い意欲のある人が、活動への参入方法が分からないようである。参加しやすい仕組みを考えてほしい。

（文化振興課）

高橋委員からは前回も図書館に来ない人をどう呼ぶかという課題の提示をいただいている。計画には県立図書館の取組ではあるが、SNS等で効果的に図書館の情報を発信してくと記載している。各地域における課題感も一緒だと思うが、地域の事情に合わせて、発信内容が検討されるものとする。

（生涯学習課）

ボランティアの高齢化については県でも把握している。第3次計画までは、読み聞かせボ

ランティア養成講座として、県内3地区で講座を実施してきた。養成講座には平成29年の開始から900人ほど受講していただいたが、すでに各地域で活躍しているので、シフトチェンジし、今年度からはあきた県庁出前講座を実施している。初心者向けにボランティアを養成したいという市町村の要望に応じ、各地域に出向いて支援できる体制を整え実施しているので、周知を図っていききたい。

(高橋委員)

興味があっても、いきなり講座に行くことに臆してしまうような若い世代に向けて、事前の情報周知を行っていただきたい。ボランティアも多様化しているので、目を向けてほしい。

(木村委員)

計画中に SNS に関する取組がいくつか見られるが、その媒体は決まっているか。

(県立図書館)

現在は Facebook 使っているが、社会状況的に Facebook の利用があまり伸びていないので、媒体の変更を館内で検討している。

(木村委員)

年齢によって利用している SNS の媒体が違っている。Facebook は40代以上が中心である。若い世代が情報を得ているのは TikTok (ティックトック) である。TikTok 上には読書に関する情報もたくさんある。つい最近のデータでは、Threads (スレッズ) の利用者が X を超えたが、X は情報が幅広く情報が埋もれてしまうし、Threads は文章専門の SNS なので情報発信に向いていないというそれぞれ欠点がある。70代以上は SNS を利用しないし、現役世代は多様である。学生は写真の投稿は Instagram、文章の投稿は Threads、情報を得たい時は X と使い分けている。県民の認知度やニーズ等を考慮しながら、どこの層にどう働き掛ければいいのか検討すべきである。

(文化振興課)

当課は X の投稿が中心である。情報発信についてはターゲット設定が重要であることは確かであるし、各 SNS はウェブサイトへの誘導の入口にもなり得る。各世代に応じた情報発信を検討していきたい。

(木村委員)

行政の公式 SNS は色々あるが、TikTok まだ少ないので、他県との差別化できるのではないかな。市役所で同様の話をした際、業務用に支給されているスマートフォンが少ないため、デジカメで写真を撮って取り込む作業の煩雑さや、個人のスマートフォンを使用すると担当

が変わった時に途絶えてしまうという欠点を聞いて、行政で支給されるスマートフォンが少ないことに驚いた。県庁も実施は難しいと思うが検討してほしい。

（加賀谷委員）

項立て3の地域における読書活動の推進に記載されているように、各市町村が図書館の機能の整備に努めているものと認識しているが、書店が無い市町村もある。書店が無い市町村の地域の子どもたちは学校図書館や公民館図書館でしか本が触れない状況である。自治体が本屋を経営する事例があるが、もっと人口規模の小さな自治体では移動販売の書店もある。図書館の機能充実も大切だが、本屋がない地域への支援も考えていかなければならない。

（文化振興課）

実施に向けては課題等あると思うが、まずは先進事例を研究したい。

（加賀谷委員）

本の取次会社が移動書店を実施している事例もある。

（中尾委員）

項立て3の地域における読書活動の推進には、障害者向けのサービスが記載されているが、今回の計画の目玉の一つではあると思う。HPを見ても、県立図書館のコーナーはかなり充実していると思う。点字図書館のイベントでは機械の展示等も行われているようだ。視覚障害者等の方たちが各施設にアクセスするサービスは充実しているが、アクセスした後に障害者の方がアウトプットできる仕組みがあると、読書につながっていくのではないか。ビブリオバトルのようなものがあったとしても良いと思うし、イベントでなくても、読書感想文をまとめた冊子を作成する等の取組があってもいいのではないか。

（生涯学習課）

ビブリオバトルの対象は中高生だが、特別支援学校にも参加募集している。県内の特別支援学校でビブリオバトルを授業で取り組んでいる学校もあるようだ。まだ参加実績はないが、問合せは来ているので、今後参加の幅を広げたい

（木村委員）

特別支援学校には発達障害から重度の障害を持っている子まで様々いる。年に1回全県の特別支援学校で作品展が行われ、アウトプットの先として本を読んだ感想を文字や言葉にすることに対しハードルが高い生徒が絵で表現するという取組があるが、読書推進として取り組んでいないので、個人の取組に止まっている。県内では、絵画から俳句等様々な芸術文

化の発表の場があるようなので、絵画展等に参加し、話す、書くだけではない発表の場があればいいと思う。会議の前に資料を読んでまず思ったのが、読書推進を進める前に、読書が好きな人の優位性に持っていかなれないようにしてほしい。

また、本を読む推進と買う推進は別であると思う。県立博物館や文学資料館に行く機会があったが、博物館で販売している本は希少価値が高く高価だし、文学資料館では本が購入できず残念だった。博物館や文学資料館等でせつかく本に触れる機会があるのに、近くに書店が無く、公的施設で本が買いやすくなったらいいと思う。企画展等の期間中、展示を見た人がその場でホットな状態で本を買えたらいい。

(中尾委員)

項立て4の(7)大学や外部機関との連携の促進に、連携したセミナー開催と記載されているが、実績はどのくらいあるのか。

(県立図書館)

秋田大学の附属病院の協力のもと、県立図書館内にがん情報に関するパンフレットを置いたコーナーを設置しているほか、年に1回セミナーを開催している。市町村立図書館を会場にする場合もあり、県内へ向けた情報提供や資料提供を行っている。

(中尾委員)

時間も迫ってきているので、今後のスケジュールについて事務局から説明願う。

(文化振興課)

次回、第3回目の協議会は11月7日金曜日の14時半から開催する。本日の協議を踏まえて計画の素案を事務局で作成し、協議会の前に委員の皆さまにお示しし、ご意見を頂戴し、それを反映させた案を協議会で協議していただく。

素案は12月の県議会において審議し、その上で成案を作成し、第4回目の協議会を書面開催として、成案を確認していただく。成案は2月の県議会において審議し、公表は3月末を予定している。

(中尾委員)

次第3「その他」について、本日の協議を通じ、ご意見やご質問等あれば伺いたい。

(高橋委員)

先日、東京の大学生がAo-naの見学に来た際に、新しい図書館ができてからティーンズコーナーの資料を充実させ、司書も情報提供しているが、利用された形跡無く、なぜこのような状況になっているか大学生に聞いてみた。3割の学生が携帯を触るようになってから本読

まなくなったと答え、7割はそれでも本を読んでいると答えたが、図書館はそもそも勉強しにいくところという認識があるようだ。図書館は本を返さなければならないので、欲しい本は購入し、自分の手元に置いておきたいと話していた。興味がある本の購入を検討する際には、ネットでかなり調べて吟味して買っており、我々以上に情報を察知していると感じた。読書推進の進め方として、「本を読む」ということをしっかりと定義して発信していく必要があると思う。

(木村委員)

図書館に関して言えば、買うかどうか迷った本を図書館で読んでから手元にずっと置きたいがどうか判断して購入するようにしているが、図書館の本は汚れや傷があったりするので、最近の若い人は潔癖なところがあって、知らない人が借りたであろう図書館の本を読むのに抵抗がある。本には読んだ人の癖が付いている。息子にも大学の図書館の利用率を聞いたところ、利用率は高いが、勉強やレポート書くための調べ物をするところという認識であるようだ。大学内はなんとなく身内感があるから公立図書館より抵抗感が少ない。前回は図書館は静かにしないといけない場所というイメージを持たれていて、それを払拭していくという話が出ていた。また、市町村立図書館に比べて県立図書館は敷居が高いというイメージもあるようだ。こういったイメージの払拭もしていかなければならないのではないかな。

以上